

平成二十二年 度

武蔵野東中学校

入 学 試 験 問 題

国 語

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

夏のある日、俄かに出水がして、リツキは両親と住んでいた土穴からあつという間におし流されてしまいました。悲鳴をあげて、手足をばたばたやりながら、水と一緒にとうとう道端の溝の中まで流されて来ましたが、そのとき運よくそばを流れる一株の草の根にしがみついたまま気を失ってしまいました。ふと気がついてみると、ぐっしより泥まみれのまま、庭の小路に転がってがんが暑い太陽の光に照らされています。そして一人の少年が立って、「おや、マングースが死んでるよ。お葬いをしてやろうよ。」と叫んでいました。

「いいえ、いけません。」今一人の母親らしい女の人が申しました。「お家へ連れて帰っておやんなさい。きっと死んじやいませんから。」

そして①彼はバンガロウへ連れて行かれました。すると一人の大男が出て来て、いきなり彼を二本の指でつまみ上げて申しました。「まだ死んじやいない。気絶しているだけだよ。」やがてリツキは生綿にくるまれて、炉の傍に置かれました。彼はそつと眼をあけて、クシンと一つくしゃみをしました。すると大男は、「さあ、恐がらせるんじやないよ。どうするか、じつと見ているんだ、いいか。」と申しました。

しかしマングースを恐がらせるなんて、とんでもないことでした。だって彼は頭の先から尻尾の端まで好奇心の塊なのです。マングース一族の標語からして、「走れ、嗅ぎ出せ。」というのであって、そしてリツキはこれ

でも生粋まきすいのマングースだったので。彼は生綿をちらと見るなり、こいつはどうも食い物にもならない、と断定しました。まずテーブルをグルツと一回りして、それからすっかり毛並みのお化粧けしょうをすませ、身体中をごしごし搔かき終わると、いきなりピョイと彼は少年の肩かたの上にとび上りました。

「おっと、静かにしておいで、テディ。」と、お父さんが申しました。「そんな風にして人間に馴なれるんだから。」
「ウアッ！ だって僕の顎あごの下をくすぐるんだもの。」と、テディがとび上って申しました。

リツキは少年の襟首えりくびに鼻の先をつつこんでみたり、耳の穴を嗅いでみたり、かと思うと床にとび下りてしきりに鼻の頭をこすりはじめました。

「ほんとに野生の獣けものなんでしょう、お父さん。」と、お母さんが申しました。「きつと、私たちがやさしくしてやったせいですわね、あんな風になれなれしくするのは。」

「マングースというのは② こうしたものだよ。」と、お父さんは答えました。「テディ、お前が尻尾をつかんでつり下げたり、籠かごの中へ入れたりしなければ、きつと一日中あんな風にして遊んでいるよ。」

そういつて、リツキに生肉の片きれを与えました。無論、大好物でした。ぺろりと平らげてしまうと、彼はヴェランダへ出て、悠然ゆうぜんと日光浴をしながら、身体中の毛並みをいっばいにふくらませて、一本一本十分に根元まで乾かわかしました。やがてすっかり元気を恢復かいふくしました。

(中 略)

翌朝も早く、リツキはテディの肩に乗っかって朝食にヴェランダへ出て来ました。バナナとゆで卵が彼の御馳走ごちそうでした。そして彼はみんなの膝ひざから膝ひざへ挨拶あいさつをして歩きました。家柄いえがらのよいマングースはみんなそうなのでした。

いつかは人間の家に飼われて、家じゅうをかけ回るような身分になるので、以前ある将軍のお屋敷やしきにいたというリツキの母親などは、よく暇ひまさえあれば彼に人間に出あった場合の③ お行儀を躰しんけておいたものでした。

朝食がすむと、リツキは早速、庭に出てみました。大変な庭でした。半分は荒れたままで、小さい小屋ほどもある熱帯バラの樹きや、菩提樹ぼだいじゆや、蜜柑みかんや、竹やぶ、恐ろしい雑草、そういつたものが、むやみに伸びています。

「これはすばらしい獵場りようばだ。」リツキはもうよだれを流さんばかりに満足しました。そう思っただけで、もう尻尾は、塚びんブラシのようにふくらみ、くんくんむやみに匂においを嗅ぎながら、庭じゅうをかけまわりました。ちょうどその時、かれはふと茂しげみのなかで、それはそれは④ 悲しそうな声を聞きました。

葉縫はぬいどり鳥のダージー夫婦でした。彼らの巢は大きな木の葉を二枚合わせて、縁ふちを繊維せんいで縫ぬい合わせたもので、その間に生綿や綿毛をいっばいにつめこんで、とても精巧なものでありました。夫婦は巢の縁にとまって、さも悲しげに泣く度に、巢は風に揺ゆれるように左右に動いています。

リツキは下から、

「どうしました。」と声をかけました。

「私たちは本当に不幸なのです。実は昨日私たちの赤ん坊がこの巢からおっこちました。ところが、あのナグの奴やつめが殺して食べてしまったのでございます。」

「なるほど、それはお気の毒です——だが、僕は新米しんまいで一向不案内いっこうふあんないなんです、そのナグって奴は一体何者です。」

しかしダージー夫婦はそれには答ええないで、大急ぎで巢の中にもぐりこみました。ちょうどその時でした。茂みの根元の雑草の間から、何か着物のすれるような、気味悪い、ぞっとするような音がしました。リッキは途端に思わず二足ばかりとび退りました。すると続いて、雑草の間から大きな真つ黒なコブラ蛇、ナグの頭とふくれた首とが少しづつあらわれました。尻尾の先まで一メートル半はあろうと思えるのが、身体の三分の一ばかりを地面からぬつと宙に浮かせたまま、ちょうどたんぽぽの花が風に揺れるように、うまく調子をとって揺れています。そしてあの、何を考えている時でも、決して変わらない恐ろしい蛇の目でリッキをぎろりと睨みすえました。「ナグは何者だ？ はははは、おれだよ。ナグは。ブラムの大神が昼寝の時、おれたちの御先祖が首をふくらませて、日陰をこさえてさし上げたものだ。お陰で大神はおれたちにちゃんと目印をつけて下さった。いいか、びくびくするな、よく見ろ。」

そういつて彼は一層強く首をふくらませました。なるほど、背中にあの眼鏡の恰好をした模様がはっきりついています。最初はリッキもちよつと尻込みを感じましたが、もとより⑤ マングースともあろうものがいつまでもびくびくしているはずがありません。リッキはまだ子供で、生きたコブラにこそ出あった経験はありませんでしたが、母親から幾度も死んだコブラの御馳走になったことはありますし、それに大人のマングースというものは、蛇と戦って食べてしまうのが仕事だということも、たびたび聞かされてきました。無論、それはナグの方でも十分承知の上なので、口では威張っても、心の底ではドキッとしていたのです。

「ふん、目印がなんだ。おい、ひとの巢から雛をとって食うって法はないぞ。」
リッキの尻尾はまたしてもふくらんできました。

⑥と、ナグはちよつと何か考え込んだように、リッキの背後のくさむらを穴のあくように見つめていました。

マングースがこの庭にはいり込んで来た以上、早晚自分たち一族の滅亡だということはナグも十分承知していました。だがとにかく、相手に油断させることだ、とナグは考えました。そこで彼はこころもち頭を低くして申しました。

「だが君、一つ話があるんだが……リッキ、君は卵を食べるだろう。じゃ、僕が鳥を食ってなぜいけないんだ。」
その時でした。突然ダージーが「ほら、後ろ、後ろに気をつけなさいよ。」と叫びました。

リッキは無論ぼんやりしているはずはありません。声を聞くが早いか、彼の身体は地を蹴って力いっぱい高く宙にとび上がっていました。とほとんど間一髪、彼の足の下をナグの妻のナゲイナの身体が投槍のように風を切って流れました。ナゲイナはナグとリッキの間答の間にいつの間にかリッキの後ろに忍びよっていたのですが、しかし恐ろしい最初の一撃が失敗に終わった次の瞬間にはかえってリッキの身体がナゲイナの背にほとんど馬乗りの恰好に落ちて来ました。そこでもしリッキがもつと老巧なマングースだったら、これは無論ナゲイナの背を一噛みで仕留める、またとない好機であったに違いありません。さすがに子供のリッキには、コブラの立ち直つて来る二度目の突撃がちよつと気がかりだったので。噛むには噛んだが、素早く相手の尻尾を避けてとびのきましました。

「やい、ダージーの畜生！」ナグは大声に叫ぶと、力いっぱい茨の枝にかけた巢をめがけて飛びつきましたが、

巢はちゃんと用意して蛇の届かない所につくられてあるので、ただ大きく揺れたばかりでした。

リッキは眼の中が熱く真っ赤になってくるのを感じました。そしてよくカンガルーのするように尻尾と後足ですわって、油断なく左右に身構えました。しかしその時はもうナグの姿もナゲイナの姿も草の中に隠れて見えなくなっていました。リッキの方でも今追いかけて、一度に二匹を相手にするだけの自信もありませんでしたから、別にあとを追おうとはしないで、とにかく家に近い砂利道まで引き返して、次の手段を考えることにしました。とにかく、彼にとっては一大事でありました。

(ラッディアード・キプリング「リッキ・ティッキ・タヴィイ物語」より)

問一 | ①「彼」とありますが、誰のことですか。「の」 という形で答えなさい。

問二 | ②「こうしたもの」とありますが、マングースとはどういうものと「お父さん」は言っているのですか。説明しなさい。

問三 | ③「お行儀を躰けておいた」とありますが、なぜですか。文章中のことばを使って説明しなさい。

問四 | ④「悲しそうな声」とありますが、(1)誰が、(2)なぜ「悲しそうな声」を出しているのですか。

問五 | ⑤「マングースともあろうものがいつまでもびくびくしているはずがありません」とありますが、その理由を二つ書きなさい。

問六 | ⑥「と、ナグはちよつと何か考え込んだように、リッキの背後のくさむらを穴のあくように見つめていました」とありますが、「ナグ」は何を考えていたのか書きなさい。

問七 | ⑦「次の手段」とありますが、「手段」とは「目的を達成するための方法」という意味です。この場合の「目的」とは一体何ですか。

問八 | この文章から読みとれる主人公リッキの性格として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 好奇心が強いあまり、冷静な判断ができない性格。

イ 好奇心よりも、論理的に考えることを優先する性格。

ウ 好奇心は強いけれど、状況を考えて行動する性格。

エ 恐がりで用心深く、安全を最優先に考える性格。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

みんな、親に対して「くやしい」と思ったことある？

どうしてそんなことを聞くのかと言えば、最近クリニックに相談に来る若い人たちから「親にこんなひどいことを言われました。くやしくてくやしくて許せない」「できれば復しゅうしたい」といったことばを聞いて、ドキリとすることが多いからだ。

たしかに、とくに親に言われたことばに「どうしてそんなひどいこと、平気で言うの？」と思うことは私にもよくあった。というか、実は今でもときどきある。このあいだ、実家に寄ったときも母親を喜ばせようと思って、「今度、この町に近いところに講演に来るんだよ」と教えたら、「こんな地方に来るなんて、東京で仕事がなくったの？」と言われて、カチンときた。

でも、そのすぐあと、母親は自分の言ったこともすっかり忘れたように「じゃ、そのときはまたうちに来るわね？なにが食べたい？」などきげんよく言い出したのだ。いつまでたっても「自分の子どもだから、冗談半分じょうたんにちよつとからかっていい」と思っているんだね。私も今さらくやしがる年でもないし、「あーあ、またか」と聞き流せるようになったけれど、もう少し若かったら「ひどい！ じゃ、そのときは絶対、うちなんか寄らないよ！」とどなったと思う。

でも、これは私だけじゃないみたいで、三〇代、四〇代の友だちと集まると、ときどき「どうしても昔、親に言われたあのひとは許せない」という話によくなる。中には今になって「お母さん、私が小学生のころ、どうして“お兄ちゃんはおりこうなのに、あんたはだれに似てデキが悪いのかねえ”なんて言ったの？」と勇気を出して問いただす人もいる。ところが、ほとんどの場合、親は「えー、そんなこと言ったっけ？ ぜんぜん覚えてない」とか「お兄ちゃんよりあなたのほうが成績もいいし、いい子だなどずっと思ってたのよ」とか言われ、「私の長いあいだの“くやしき”はなんだったの？」と逆にがっかりきたりするらしい。

子どもはなんでも本気に取るんだから、親とはいえ、冗談半分で傷つくようなことは言わないでほしい。私は“元子ども”としてそう思う。でも、おとなの立場としては子どもたちにも、「親って子どもにはつい気を許して、ほかの人には言わないようなことも言っちゃうイキモノなんだよね。だから、あまり深刻に受け止めないで」と言いたい。

もちろん、おとなに言われたことを「くやしい！」と思ったり、「今に見てろ！」と思ったりすることも、人間の成長には必要なことだ。だからといって、何十年も「親は許せない」と思い続けたり、「復しゅうしてやる」と自分が傷つくようなことをしたりするのは、損というもの。「ひどーい！」と怒りながらも、「あー、また言うてるよ」と余ゆうの態度で接するのも“上手な親とのつきあい方”なのかもしれない。

A 親や先生に言われてくやしかった「忘れられないひとこと」はありますか

B 親や先生に言われてうれしかった「忘れられないひとこと」はありますか

C あなたがおとなになったら、子どもや若者にどんなことばをかけてあげたいですか

(香山リカ「10代のうちに考えておくこと」より)

問一 筆者はどのような仕事をしていると考えられますか。次の文の（ ）①～③にあてはまることばを、文章中から書きぬきなさい。

・精神科医として、（ ① ）に来た人の（ ② ）を受けたり、いろいろな場所へ行って（ ③ ）を行ったりしている。

問二 |線部「こんな地方に来るなんて、東京で仕事がなくなったの？」とありますが、筆者の母親はどういう気持ちで筆者にこういうことを言ったと考えられますか。その気持ちが書かれている部分を文章中から二十六字で探し、その最初と最後の五字ずつを書きぬきなさい。

問三 筆者は、「元子ども」の立場から親に対してどうして欲しいと言っていますか。それが書かれている一文を文章中から探し、その最初の五字を書きぬきなさい。

問四 筆者は、子どもは親に対してどういうふうにつきあうのが良いと言っていますか。文章中の言葉を使って説明しなさい。

問五 A～Cの問いかけに対する、あなたの意見・感想をあとの指示にしたがって書きなさい。

- ・ A～Cの問いかけに対して、一つを選んで書いても、複数を選んで書いてもかまいません。
- ・ 字数は百二十字以上、百六十字以内とします。
- ・ 原稿用紙の正しい使い方にのっとり、丁寧な字で記入してください。

三 漢字・語句に関する次の問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の―線部の漢字には読みがなをつけ、⑥～⑩の―線部のカタカナは漢字に直して書きなさい。
(必要に応じて送りがなもつけなさい。)

- ① 眼下げんげに美しい山々。
- ② 易やすしい問題ばかりだ。
- ③ 接戦せつせんが続いている。
- ④ 天高く馬肥うまえる秋。
- ⑤ 先生の指図さしずでみんなが仕事をする。
- ⑥ 夜空にギンガぎんがが美しい。
- ⑦ 友達に消しゴムをカシテかしてあげた。
- ⑧ 台風が接近してボウフウウぼうふううが心配だ。
- ⑨ 新しいギジュツぎじゅつを取り入れる。
- ⑩ 土をタガヤシテたがやして、なえを植えた。

問二 次の文中の「」の言葉が正しく使用されていれば○を、まちがっていれば×をつけなさい。

- ① 彼のシュートの正確さは「生き馬の目を抜くぬ」ようだ。
- ② 「水を得た魚」のようにきれいに泳いでいる。
- ③ 悪口を言われて「腹の虫がおさまらない」。
- ④ 「お茶をにごす」ほど、ひどくにごった水たまりだった。
- ⑤ 校長先生が「おいでになる」らしい。
- ⑥ 先生に対して、父が予定を「おっしやった」。

問三 次の意味をあらわす四字熟語をそれぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ① 誰に対してもあいそがよい
 - ア 平身低頭へいしんていとう
 - イ 八方美人はっぽうびじん
 - ウ 破顔一笑はがんいつしやう
 - エ 月下氷人げつかひようじん
- ② しばしば
 - ア 三寒四温さんかんしおん
 - イ 三三五五さんさんごご
 - ウ 再三再四さんさんさいし
 - エ 三拝九拝さんばいきゅうはい
- ③ 似たりよったり
 - ア 千差万別せんさばんべつ
 - イ 千変万化せんべんばんか
 - ウ 同工異曲どうこういきよく
 - エ 岡目八目おかめはちもく
- ④ すぐれた才能や技術をもつ
 - ア 一刀兩断いっとうりやうだん
 - イ 一世一代いっせいちだい
 - ウ 一生懸命いっしょうけんめい
 - エ 一騎当千いっきとうせん

受験番号	氏名
------	----

一	
問一	マンガースのリッキ
問二	(例)好奇心旺盛で 人をこわがったりせぜになれなれしくするもの。
問三	(例)家柄のよいマンガースはいつかは人間の家に飼われて 家じゅうを かけ回るような身分になるから。
問四	(1)葉縫鳥のダージー夫婦 (2)赤ん坊が巣から落ちてナグが殺して食べてしまったから。 ・ 母親から幾度も死んだコブラの御馳走になったことがあるから。 ・ 大人のマンガースは蛇と戦って食べてしまうのが仕事だと聞かされていたから。
問五	(例)マンガースを相手に、まずは油断させることが大切だということ。 (ナゲイナがリッキの後ろにいるため、こちらに気を引こうとした。)
問七	(例)コブラのナグとナゲイナと戦って 二人を殺すこと。
問八	ウ

二	
問一	① クリニック
問二	自分の子ども
問三	子どもはな
問四	(例)自分が傷つくようなことはせず、「ひどい」と怒りながらも、 「また言うてるよ」と余ゆうの態度で接するのが良い。
問五	略

三	
問一	① がんか
問二	② やさ
問三	③ せつせん
問四	④ こ
問五	⑤ さしず

問一	四	六各4点×3〃12点
問二	三	五各3点×6〃18点
問三	二	八各5点×2〃10点
問四	一	四
問五	一	四
問六	一	四
問七	一	四
問八	一	四
問九	一	四
問一〇	一	四
問一一	一	四
問一二	一	四
問一三	一	四
問一四	一	四
問一五	一	四
問一六	一	四
問一七	一	四
問一八	一	四
問一九	一	四
問二〇	一	四
問二一	一	四
問二二	一	四
問二三	一	四
問二四	一	四
問二五	一	四
問二六	一	四
問二七	一	四
問二八	一	四
問二九	一	四
問三〇	一	四
問三一	一	四
問三二	一	四
問三三	一	四
問三四	一	四
問三五	一	四
問三六	一	四
問三七	一	四
問三八	一	四
問三九	一	四
問四〇	一	四
問四一	一	四
問四二	一	四
問四三	一	四
問四四	一	四
問四五	一	四
問四六	一	四
問四七	一	四
問四八	一	四
問四九	一	四
問五〇	一	四
問五一	一	四
問五二	一	四
問五三	一	四
問五四	一	四
問五五	一	四
問五六	一	四
問五七	一	四
問五八	一	四
問五九	一	四
問六〇	一	四
問六一	一	四
問六二	一	四
問六三	一	四
問六四	一	四
問六五	一	四
問六六	一	四
問六七	一	四
問六八	一	四
問六九	一	四
問七〇	一	四
問七一	一	四
問七二	一	四
問七三	一	四
問七四	一	四
問七五	一	四
問七六	一	四
問七七	一	四
問七八	一	四
問七九	一	四
問八〇	一	四
問八一	一	四
問八二	一	四
問八三	一	四
問八四	一	四
問八五	一	四
問八六	一	四
問八七	一	四
問八八	一	四
問八九	一	四
問九〇	一	四
問九一	一	四
問九二	一	四
問九三	一	四
問九四	一	四
問九五	一	四
問九六	一	四
問九七	一	四
問九八	一	四
問九九	一	四
問一〇〇	一	四
問一〇一	一	四
問一〇二	一	四
問一〇三	一	四
問一〇四	一	四
問一〇五	一	四
問一〇六	一	四
問一〇七	一	四
問一〇八	一	四
問一〇九	一	四
問一一〇	一	四
問一一一	一	四
問一一二	一	四
問一一三	一	四
問一一四	一	四
問一一五	一	四
問一一六	一	四
問一一七	一	四
問一一八	一	四
問一一九	一	四
問一二〇	一	四
問一二一	一	四
問一二二	一	四
問一二三	一	四
問一二四	一	四
問一二五	一	四
問一二六	一	四
問一二七	一	四
問一二八	一	四
問一二九	一	四
問一三〇	一	四
問一三一	一	四
問一三二	一	四
問一三三	一	四
問一三四	一	四
問一三五	一	四
問一三六	一	四
問一三七	一	四
問一三八	一	四
問一三九	一	四
問一四〇	一	四
問一四一	一	四
問一四二	一	四
問一四三	一	四
問一四四	一	四
問一四五	一	四
問一四六	一	四
問一四七	一	四
問一四八	一	四
問一四九	一	四
問一五〇	一	四
問一五一	一	四
問一五二	一	四
問一五三	一	四
問一五四	一	四
問一五五	一	四
問一五六	一	四
問一五七	一	四
問一五八	一	四
問一五九	一	四
問一六〇	一	四
問一六一	一	四
問一六二	一	四
問一六三	一	四
問一六四	一	四
問一六五	一	四
問一六六	一	四
問一六七	一	四
問一六八	一	四
問一六九	一	四
問一七〇	一	四
問一七一	一	四
問一七二	一	四
問一七三	一	四
問一七四	一	四
問一七五	一	四
問一七六	一	四
問一七七	一	四
問一七八	一	四
問一七九	一	四
問一八〇	一	四
問一八一	一	四
問一八二	一	四
問一八三	一	四
問一八四	一	四
問一八五	一	四
問一八六	一	四
問一八七	一	四
問一八八	一	四
問一八九	一	四
問一九〇	一	四
問一九一	一	四
問一九二	一	四
問一九三	一	四
問一九四	一	四
問一九五	一	四
問一九六	一	四
問一九七	一	四
問一九八	一	四
問一九九	一	四
問二〇〇	一	四
問二〇一	一	四
問二〇二	一	四
問二〇三	一	四
問二〇四	一	四
問二〇五	一	四
問二〇六	一	四
問二〇七	一	四
問二〇八	一	四
問二〇九	一	四
問二一〇	一	四
問二一一	一	四
問二一二	一	四
問二一三	一	四
問二一四	一	四
問二一五	一	四
問二一六	一	四
問二一七	一	四
問二一八	一	四
問二一九	一	四
問二二〇	一	四
問二二一	一	四
問二二二	一	四
問二二三	一	四
問二二四	一	四
問二二五	一	四
問二二六	一	四
問二二七	一	四
問二二八	一	四
問二二九	一	四
問二三〇	一	四
問二三一	一	四
問二三二	一	四
問二三三	一	四
問二三四	一	四
問二三五	一	四
問二三六	一	四
問二三七	一	四
問二三八	一	四
問三三九	一	四
問三四〇	一	四
問三四一	一	四
問三四二	一	四
問三四三	一	四
問三四四	一	四
問三四五	一	四
問三四六	一	四
問三四七	一	四
問三四八	一	四
問三四九	一	四
問三五十	一	四
問三五一	一	四
問三五二	一	四
問三五三	一	四
問三五四	一	四
問三五五	一	四
問三五六	一	四
問三五七	一	四
問三五八	一	四
問三五九	一	四
問三六〇	一	四
問三六一	一	四
問三六二	一	四
問三六三	一	四
問三六四	一	四
問三六五	一	四
問三六六	一	四
問三六七	一	四
問三六八	一	四
問三六九	一	四
問三七〇	一	四
問三七一	一	四
問三七二	一	四
問三七三	一	四
問三七四	一	四
問三七五	一	四
問三七六	一	四
問三七七	一	四
問三七八	一	四
問三七九	一	四
問三八〇	一	四
問三八一	一	四
問三八二	一	四
問三八三	一	四
問三八四	一	四
問三八五	一	四
問三八六	一	四
問三八七	一	四
問三八八	一	四
問三八九	一	四
問三九〇	一	四
問三九一	一	四
問三九二	一	四
問三九三	一	四
問三九四	一	四
問三九五	一	四
問三九六	一	四
問三九七	一	四
問三九八	一	四
問三九九	一	四
問四〇〇	一	四
問四〇一	一	四
問四〇二	一	四
問四〇三	一	四
問四〇四	一	四
問四〇五	一	四
問四〇六	一	四
問四〇七	一	四
問四〇八	一	四
問四〇九	一	四
問四一〇	一	四
問四一一	一	四
問四一二	一	四
問四一三	一	四
問四一四	一	四
問四一五	一	四
問四一六	一	四
問四一七	一	四
問四一八	一	四
問四一九	一	四
問四二〇	一	四
問四二一	一	四
問四二二	一	四
問四二三	一	四
問四二四	一	四
問四二五	一	四
問四二六	一	四
問四二七	一	四
問四二八	一	四
問四二九	一	四
問四三〇	一	四
問四三一	一	四
問四三二	一	四
問四三三	一	四
問四三四	一	四
問四三五	一	四
問四三六	一	四
問四三七	一	四
問四三八	一	四
問四三九	一	四
問四四〇	一	四
問四四一	一	四
問四四二	一	四
問四四三	一	四
問四四四	一	四
問四四五	一	四
問四四六	一	四
問四四七	一	四
問四四八	一	四
問四四九	一	四
問四五〇	一	四
問四五一	一	四
問四五二	一	四
問四五三	一	四
問四五四	一	四
問四五五	一	四
問四五六	一	四
問四五七	一	四
問四五八	一	四
問四五九	一	四
問四六〇	一	四
問四六一	一	四
問四六二	一	四
問四六三	一	四
問四六四	一	四
問四六五	一	四
問四六六	一	四
問四六七	一	四
問四六八	一	四
問四六九	一	四
問四七〇	一	四
問四七一	一	四
問四七二	一	四
問四七三	一	四
問四七四	一	